

ないのか？	）と、	普段より	も語気が	荒い女将	（女将さん	はあの蛙	たちをあまり	良く思っ	て	の場所は	温泉のよう	な感覚だ	ろうね。」	くせに綺麗	好きなあ	いつらには、	さながらあ	と温かい	空間、暗	くてじめ	つとした	所を好む	「まあ、	広い意味	では正解	だね。適	度な湿度	「それは	・・居心	地が良い	から、で	すか？	「	「あの二匹	がどうして	この地下	なんかに住	みついて	ると思う	？」	「不思議	な力？」	「	た蝦蟇	たちの不	思議な力	が関係し	ている。」	「それは	ピエール	とカトリ	ー又、あ	のふざけ	「なぜ	ですか？」	「	「利他が	なぜ壺へ	向かうの	かは想像	がつく	「	い霧の中	の階段を	下に向か	って降り	ていった	掛ける。	側にある	提灯を取	り外し、	番才は白	前と同じ	場所に自	分の名前	の書かれ	た札を	不思議な	助言
-------	-----	------	------	------	-------	------	--------	------	---	------	-------	------	-------	-------	------	--------	-------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-----	---	-------	-------	------	-------	------	------	----	------	------	---	-----	------	------	------	-------	------	------	------	------	------	-----	-------	---	------	------	------	------	-----	---	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-----	------	----

「あ	「期	い	な	又	「ま	「気	こ	の		消	は	在	浮	す	「餌	に		た	の
ん	待	る	も	に	あ	体	こ	じ	「も	え	土	し	か	ぐ	？	あ	。	。	言
た	を	の	ん	関	あ	”	の	ゃ	も	て	に	て	し	に	」	。			葉
が	。	は	だ	し	れ	？	住	な	ち	い	潜	い	か	脳	「	。			遣
想	。	、	が	て	だ	？	人	い	ろ	っ	り	。	。	内	」				い
像	。	人	ね	は	け	空	達	。	ん	た	穴	。	。	に					に
で	。	が	。	、	べ	気	の	あ	た	が	に	。	。	目					、
き	。	抱	で	ほ	ラ	を	”	の	今	が	。	。	。	を					番
る	。	く	違	と	ベ	食	き	二	想	食	。	。	。	覆					才
範	。	方	う	ん	ラ	べ	たい	匹	像	べ	。	。	。	い					は
囲	。	の	。	ど	と	て	”	が	し	い	。	。	。	た					少
の	。	”	。	空	喋	い	だ	食	て	る	。	。	。	い					し
生	。	期	。	気	っ	ん	よ	る	よ	う	。	。	。	っ					だ
物	。	待	。	を	て	で	。	す	う	。	。	。	。	た					け
で	。	”	。	食	る	す	。	か	。	。	。	。	。	た					親
は	。	だ	。	べ	カ	？	。	？	。	。	。	。	。	い					近
な	。	よ	。	る	ト	」	。	」	。	。	。	。	。	っ					感
い	。	。	。	よ	リ	」	。	」	。	。	。	。	。	た					を
と	。	。	。	う	ー	」	。	」	。	。	。	。	。	っ					覚
	。	。	。	。		」	。	」	。	。	。	。	。	た					え

「あの子は、一番辛い方法をあえて選んでい	を見つめていた。	番才は、あと数メートル先のオレンジ色の光	柔らかい地面を掴みながら暗闇の中を進む							「利他さんが・・・」	掛け合わせてみな。」	「それに利他が何をしようとしているのかを	を・・・」	「利他さんが・・・期待を食べる蛙に・・・何	ろうね。あの蝦蟇どもの力を。」	かはわからんが、どこかで理解しているのだ		「利他がその事実には気付いているのかどう	かを考えることにした。	をやめ、利他があので二匹に何を求めているの	超えている。番才は蛙のことを一旦考えるの	っている時点で、とうに自分の想像の範囲は	あの巨体とそしてなによりも意志を持って喋	なぜ足を運ぶのかも自ずとわかってくる。」	いうことさ。けどそうだとわかれば、利他が
----------------------	----------	----------------------	---------------------	--	--	--	--	--	--	------------	------------	----------------------	-------	-----------------------	-----------------	----------------------	--	----------------------	-------------	-----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------

ばくばくとカトリー又が喋る度に開閉する、
 いいわよ、もう油溢れちゃってまゝす。
 てかもうそんな飛ばす？あたしはいつでも
 「なくになくにい、じゃあ何する？あつ、
 け、薄い膜の張った目を二、三度瞬かせた。
 ぬるぬるとした肌が触れそうなほど顔を近づ
 間、場違いな笑い声を一通り響かせた後で、
 をペタペタと叩いている。荘厳な雰囲気と空
 カトリー又は前足を上げて水かきのついた手
 ケロしちゃう。」
 くだ、そんなこと言われたらあたし胸がケロ
 ここに来た時点で決まってるだろうって？や
 いたかったわ。あなたは？えっ、そんなの
 「ゲ、ロゲ、ロ。」ようこそ番才ちゃん。会
 「うわあ！」
 目の前に巨大な黒い影があつた。
 の縁の地面に置こうと視線を真横に向けると
 壺への入り口をくぐり、提灯をその入り口
 その女将の言葉が頭から離れなかつた。
 するのかもしれないね。」

し	と	工	へ	得	か	れ	く	抜	ピ		番	ま	ま	も	分	イ	「	温	ほ
て	と	と	う	力	説	よ	。	き	工		才	く	く	と	泌	ン	あ	い	と
い	、	呼	る	く	得	、	。	で	探		は	し	し	中	？	ら	。	風	ん
る	強	ん	さ	。	力	あ	。	で	し		は	た	す	？	溢	。	に	ど	ど
と	烈	で	い	ゲ	皆	た	。	い	て		は	て	。	ち	れ	番	閉	閉	閉
、	に	い	な	口	無	し	。	あ	ん		手	。		よ	て	才	じ	じ	じ
「	印	る	な	口	く	そ	。	た	の		で			っ	ん	は	て	て	て
ゲ	象	蛙	と	口	。	ん	。	し	？		一			と	の	あ	。	。	。
く	に	の	肩	口	い	な	。	が	？		匹			く	？	れ			
口	残	名	を	口	き	尻	。	楽	い		の			、	番	。			
ゲ	つ	前	竦	く	な	軽	。	し	じ		蛙			あ	才	。			
く	て	が	め	！	真	じ	。	ま	ゃ		を			た	ち	。			
口	い	ピ	、	ー	顔	ゃ	。	せ	な		聞			。	ゃ				
ゲ	る	エ	カ		に	な	。	て	く		き			と	ん				
く	色	ール	トリ		な	い	。	あ	い		流			か	ん				
口	味	だ	ー		っ	か	。	。	あ		し			言	な				
ー	を	っ	又		て	ら	。	。	ん		な			い	奴				
と	思	た	が		も	ね	。	。	の		探			つ	。				
カ	い	っ	ピ		説	？	。	。	？		した			つ	。				
ト	出	こ	ピ		説	て	。	。	？		。			て	。				

番才は咄嗟に謝罪する理由を探し実行に移そ	したら！？)	うことは、相手の考えていることが読めると	のかもしれない。それか、期待を食べるとい	（自分の反応が原因で何か不機嫌にさせた	を膨らませては萎ませてを繰り返している。	の騒がしさが嘘だったみたいに、ただただ喉	けた。だが、それでもカトリィ又は数十秒前	番才は少しだけ声を張って同じ台詞を投げか	しかし声が届いていないのか何の反応もない	「すいません・えっと、カトリィ又さん	かけた。	らまし目を閉じるカトリィ又の方を向き声を	飲み込み、番才はふてくされたように喉を膨	（お前がやかましいからだよ）という言葉を	たわよ。」	早くあたしの胸に飛び込んでこないからバレ	「ほらバレたほらバレたく。番才ちゃんが	気付いた。	リー又とは違う笑い声が輪唱し始めたことに
----------------------	--------	----------------------	----------------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	--------------------	------	----------------------	----------------------	----------------------	-------	----------------------	---------------------	-------	----------------------

うとしたが、「困ったことがあったらね・・
 とここに来る前に女将に教わった方法を思い
 出し、その前に試してみることにした。
 「今日ここに来たのは、あることについて
 話をしたかったからなんです。あ・の・の・
 “カトリーヌ”」
 「あらあ、な・く・に・く・？ やっぱあたしと番才
 やんの仲じゃな・く・い・。なんかさつきより距
 離が近づいた気がするんですけど・。身体も
 く心もく。ゲツゲツゲく。」
 「呼び捨てで呼んでごらん。」という女将の呆
 れたような顔が、自分でも今再現できている
 ような気がした。
 「あること・く・つて・く・、な・く・に・く・の・く・こ・く・と
 く？」
 ピエールの声に反応して顔を元の真剣な表情
 に戻した番才は、でっぴりとした二匹の蛙に
 前後を挟まれていることにも気づき、カトリ
 ーヌの機嫌を損ねないようにゆっくりと数歩
 後ずさり三角形を作った。入口が正面になる

「あいつが毎日胸一杯に期待を溜めてやって	「どういうことですか？」	あ専ら最近は何利他にお世話になってる。」	しらが食いつぱぐれることがないのさく。ま	馬鹿でお利口な奴が沢山いるからねえ、あた	「八雲から聞いたね？ そうだよ。ここには	吐いてから話し始めた。	手で拭ってその手を舐め、「バフっ」と息を	顔を近づけ瞬きをし、目の前で顔の何かを両	は、その発言を聞きピタリと話すのを止めた	「えくつとねく」と話途中だったカトリー又	「それは、お二人の力と関係してますか？」	はずさ。」	やんも聞いたらきつと笑いが込み上げてくる	「だって我らが利他さんの話だろう？ 番才ち	番才は笑いを遮るために大きな声を出す。	「何がそんなに面白いのですか？」	しているようだだった。	に笑う蛙たちの姿は、残酷な弱肉強食を象徴	細い目をさらに細め、大口を開け転げるよう
----------------------	--------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-------	----------------------	-----------------------	---------------------	------------------	-------------	----------------------	----------------------

か	懐	し	の	れ	「	と	「	最	『	「	あ	「	「	い	ん	は	そ	お	来
び	葉	い	か	よ	僕	し	僕	高	こ	ん	い	ん	？	た	た	教	ん	れ	て
、	の	事	、	。	は	て	は	だ	こ	と	つ	と	？	が	が	え	な	は	言
番	森	は	そ	本	す	く	す	っ	こ	と	の	と	」	こ	こ	て	こ	れ	う
才	で	な	れ	当	ろ	れ	ね	た	こ	な	分	ね	」	こ	こ	れ	れ	の	の
は	必	い	を	に	ッ	」	」	ね	こ	こ	ま	」	」	こ	こ	で	で	さ	さ
改	死	ね	想	ど	ゲ	だ	無	」	こ	こ	河	」	」	こ	こ	償	償	は	は
め	に	え	像	こ	ッ	ね	間	」	き	こ	原	」	」	こ	こ	お	お	は	は
て	償	。	す	で	ッ	」	地	」	使	き	で	」	」	こ	こ	う	う	は	は
自	い		る	そ	！		獄		っ	使	石			こ	こ	っ	っ	は	は
分	方		だ	ん	笑		に		て	っ	を			こ	こ	て	て	は	は
の	を		け	な	わ		ま		く	て	積			こ	こ	さ	さ	は	は
軽	探		で	こ	せ		で		れ	く	む			こ	こ	」	」	は	は
率	す		も	を	な		」		」	れ	」			こ	こ	」	」	は	は
な	利		こ	覚	い		」		」	」				こ	こ	」	」	は	は
発	他		ん	え	で		」		」	」				こ	こ	」	」	は	は
言	の		な	て	お		」		」	」				こ	こ	」	」	は	は
を	姿		に	く	く		」		」	」				こ	こ	」	」	は	は
悔	が		可	る	落		」		」	」				こ	こ	」	」	は	は
い	浮		笑	る	」		」		」	」				こ	こ	」	」	は	は

た。	「どうしたの番才ちゃん？笑うのを堪える	のは体に毒だよ。可笑しい時は笑わなきゃ人	生損するだけだよ。」	それから次々と利他がここで提示した償い方	を上げては、蛙たちは手を叩いて笑いあつた	「そ、それでっ、それであたしたちは、毎回	利他に、ゲロツ、利他にき、聞くのさ。そん	なことをして一体、一体誰がよろこ、喜ぶの	さつて。そしたら、そしたらあの子・ゲツ	ゲツゲツ、『そうか。』って、毎回、ヒツヒツ	毎回、『そうか。』って言って帰っていくんだ	よ。ゲくゲく。』	カトリ―又は手足が小刻みに痙攣している。	笑う理由がわかるだけに番才は、複雑な心境	の置き場を心の中に据えることが嫌になり蛙	に問うた。	「それがわかつているのなら、なぜ利他さ	んに伝えてあげないのですか？期待が食べら	れなくなるからですか！？」
----	---------------------	----------------------	------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	-----------------------	-----------------------	----------	----------------------	----------------------	----------------------	-------	---------------------	----------------------	---------------

湯	を		く	り	「	で	を	て	れ	い	『	て	い	聞	ね	め	「	膨	カ
へ	わ	「	」	「	」	も	す	こ	て	と	そ	考	事	く	、	に	馬	ら	ト
と	か	利	と	そ	バ	毎	れ	こ	宿	思	う	え	じ	、	、	あ	鹿	ま	リ
向	っ	他	言	し	フ	日	て	に	に	わ	か	て	や	、	、	た	せ	ー	ー
か	て	さ	っ	て	っ	こ	こ	来	帰	い	」	考	な	、	、	め	て	又	又
い	い	ん	て	あ	と	こ	の	て	、	い	。'	え	い	、	、	さ	目	は	は
な	る	は	ま	た	息	こ	か	否	そ	こ	。'	考	い	、	、	。'	だ	寝	寝
が	ん	、	た	し	を	こ	わ	定	し	こ	え	抜	？	、	、	。'	け	転	が
ら	で	何	た	た	吐	に	か	さ	て	に	い	い	、	、	、	。'	を	が	つ
わ	す	を	ち	ち	き	来	っ	れ	ま	来	て	い	、	、	、	。'	番	た	た
か	か	す	は	蛙	カ	る	て	た	た	て	る	、	、	、	、	才	ま	ま	
り	！	れ	。'	。'	ト	わ	の	ま	色	あ	に	、	、	、	、	に	ま	ま	
や	？	償		な	リ	け	に	た	々	た	さ	、	、	、	、	向	腹	腹	
す	」	い		く	ー	。'	さ	。'	考	し	、	、	、	、	け	を	を	を	
く		に		ん	又	。'	、	本	え	ら	、	、	、	、	、	、	、	、	、
話		な		ち	は	当	そ	当	た	に	、	、	、	、	、	、	、	、	、
を		る		ゃ	起	は	れ	は	振	否	、	、	、	、	、	、	、	、	、
逸		の		っ	き	上	、	何	り	定	、	、	、	、	、	、	、	、	、
ら		か		て	上	が	、	何	し	さ	、	、	、	、	、	、	、	、	、
そ																			

死	劇	楽	と	な	死	か	て	め	ど	馬	ど	も		湯	カ	「	作	め	う
な	の	を	周	の	だ	っ	め	に	ね	鹿	っ	の	「	に	ト	彼	を	る	と
の	よ	見	り	の	と	つ	え	あ	、	が	ち	を	一	浸	リ	は	無	。	し
。	。特	出	に	。い	か	て	に	ん	そ	同	も	ね	か	か	ー	視	、	た	カ
。特	に	し	ち	わ	。よ	を	ど	な	ん	じ	不	“	っ	。こ	又	し	番	カ	ト
。人	間	て	や	。よ	ほ	ん	う	は	は	境	幸	”	。こ	。こ	は	て	才	ト	リ
は	ね	る	ほ	う	の	の	し	た	だ	遇	に	共	。こ	。こ	は	は	正	の	リ
。あ	の	野	や	は	ち	よ	て	の	の	に	な	有	。こ	。こ	正	面	の	お	尻
。あ	の	郎	さ	さ	よ	つ	そ	自	自	に	っ	”	。こ	。こ	面	へ	の	の	辺
。あ	の	っ	れ	れ	う	と	の	己	己	傷	。こ	だ	。こ	。こ	へ	回	の	の	り
。あ	の	だ	る	る	や	で	決	満	満	を	。こ	と	。こ	。こ	回	っ	の	の	を
。あ	の	け	で	し	っ	し	断	足	足	負	。こ	勘	。こ	。こ	っ	た	の	の	触
。あ	の	の	よ	く	っ	く	を	よ	よ	つ	。こ	違	。こ	。こ	。こ	。こ	の	の	り
。あ	の	こ	？	？	っ	。こ	し	。こ	。こ	て	い	い	。こ	。こ	。こ	。こ	の	の	を
。あ	の	も	そ	こ	。こ	に	た	何	の	く	い	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	の	の	触
。あ	の	そ	う	。こ	。こ	。こ	の	た	た	れ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	の	の	っ
。あ	の	う	ね	。こ	。こ	。こ	か	。こ	。こ	の	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	の	の	て
。あ	の	必	。こ	。こ	。こ	。こ	か	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	の	の	止
。あ	の	。悲	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	の	の	。止

「い い 番 才 ち ゃ ん 。今 ま で 食 べ て き た あ	に 顎 を 乗 せ て 話 し て く れ た 。	よ う に 息 を 吐 き 肘 を 湯 と 陸 の へ り に つ き そ こ	え て は 頭 を 搔 き を 繰 り 返 し 、 や が て 観 念 し た	又 は 頭 を 搔 き 付 い た 油 を 喉 に 塗 っ て 何 か を 考	詰 め 寄 る 番 才 と 数 秒 間 見 つ め 合 っ た カ ト リ ー	「何 の 話 で す か ！ ？」	し か な ら な い で し よ う が あ ！	れ が わ か っ た と こ ろ で 番 才 ち ゃ ん に は 負 担 に	「こ う ら ピ エ ち ゃ ん ！ や め な さ い っ て ば ！ そ	「わ か く っ て も で き な い く 、 事 情 が ね く 、	い の よ 。」	「あ っ こ ら ピ エ っ ！ 余 計 な こ と 言 わ な く て い	本 当 は く 、	「げ く ロ ゲ く ロ ゲ く ロ く 。利 く 他 く は ね く	た 。	る で 自 分 自 身 に 言 い 聞 か せ て い る み た い だ っ	カ ト リ ー 又 は 一 度 も こ ち ら を 振 り 向 か ず 、 ま	て る っ て 感 じ い ？	く 、 ま あ あ た し ら は 面 白 い か ら そ の ま ま に し
--	---	--	--	--	--	--	---	--	--	---	-------------------	--	-----------------------	---	--------	--	--	--------------------------------------	--

